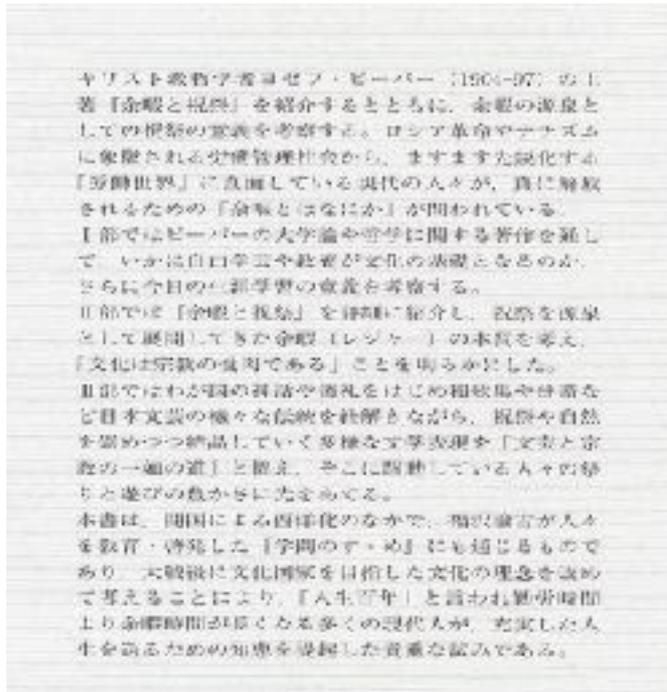


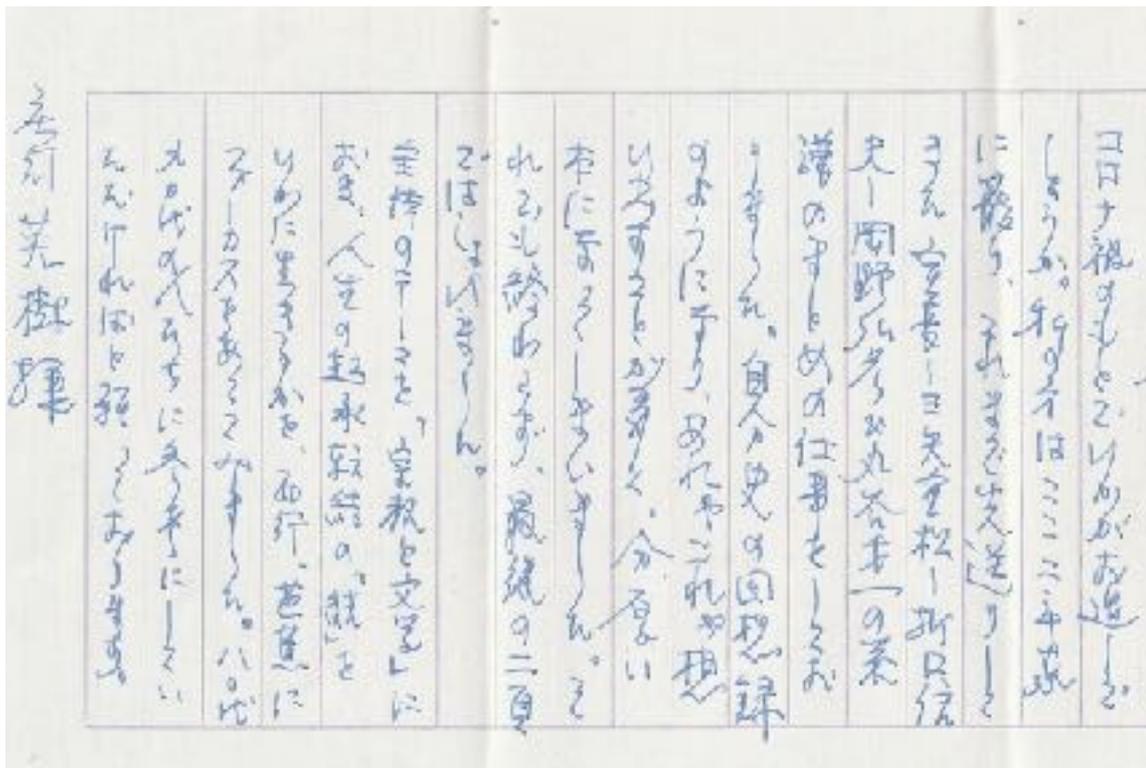
「余暇と祝祭」 松田義幸氏

64回（昭和32年卒） 庄司英樹

「余暇と祝祭」—文化の基礎—（知泉書館）を編者の松田義幸氏から頂いた。キリスト教哲学者ヨゼフ・ピーバー（1904—97）の『余暇と祝祭』を紹介するとともに「余暇の源泉としての祝祭の意義」を考察した500頁の大著である。



そしてこのような手紙が添えてあった。



松田氏は1939年鶴岡市生まれ 鶴岡南高校65回（昭和33年）卒の鶴翔同窓会同窓生。

東京教育大学卒業後に日経新聞社余暇開発センターの研究員を務め、教職では聖心女子大学、筑波大学・大学院、お茶の水大学大学院、実践女子大学・大学院で教鞭をとり尚美学園大学第二代学長、第三代理事長を務めた経歴の持ち主。

高校在学中は面識がなかったが、県政を取材するようになって、当時山形県企画部門で活躍されていた富塚陽一氏（57回・昭和25年卒 元鶴岡市長）から中央で活躍している同窓生の一人として松田義幸氏の存在を教えてもらった。

1970年代の高度成長期に「余暇」が話題になり、通産省主導で設置された「余暇開発センター」その初代理事長に就任したのはMr.MITI(=通産省)とて知られ、城山三郎の「官僚たちの夏」のモデルにもなった佐橋滋氏が初代理事長として就任した。記憶違いでなければ、その佐橋滋氏から「余暇開発センター」にスカウトされたと聞いている。

85年（昭和60）策定の第7次山形県総合開発計画には山形県が目指す象徴として「新アルカディア構想」が山形県総合開発審議会（会長 伊藤善市東京女子大教授）から答申された。松田氏は、その東京部会委員であった。

企画部長として策定に携わった富塚陽一氏は「少年時代（旧制中学生・終戦直後）に、田植えの手伝いをした時、農作業は肉体労働で大変だったが、農業者は作物をととても温かく扱い、よく育ってくれるように心から願って作業していることに感動した。それ以来、いつも『農林業者は温かい心で田畑の作業を重ねているから極めて文化性豊かな作物を産出し、広大な平野も若々しい生命にあふれた美しい空間を形成してきた』と思い続けている」という。そこで第7次山形県総合開発計画の策定にあたり山形県の農林業を「明るく夢のある産業」とのイメージで認識し続けられるように「アルカディア山形」の構想を県総合開発審議会に諮ったとのことであった。これは松田義幸氏らが推進していた余暇開発

を目指す方向と同じくするものであった。この著には「余暇の本質」「真の余暇を実現するために」として、その論考が記述されている。

また「神憑り・物狂い」―祝祭の美学―の項では、「一般的に、学術研究となると、ニッポン文芸史、芸術史も、宗教と一如の視点をあまり扱わないのですが、「本居宣長→三矢重松→折口信夫→岡野弘彦・丸谷才一」の先生方の古代信仰の流れを汲むプロジェクトを回想

し、俳句、芭蕉と「奥の細道」についての考察、ドナルド・キーン氏と国文学者小西甚一氏との交流の付き人としての思い出等について記述し、高校時代から現在に至る研究について述べている。

「黒川能」「奥の細道と芭蕉の句境」『おくのほそ道』紀行300年祭に取り組んだプロジェクトを岩波書店「文学」1986年12月号を「中央と地方」特集にしてもらったこと。この特集号は21世紀の地域創成プロジェクト関係者にぜひ読んでもらいたいと「江戸と地方文化」として短く再構成して盛り込んでいる。

また「本居宣長の国学・国文学の系譜」では（1）海坂藩のモデル<出羽の国庄内の文化風土>（2）丸谷才一の詞華集から捉えた日本文学史（3）岡野弘彦の贈り物（4）丸谷才一の日本文学史三部作と「輝く日の宮」（5）本居宣長の「古事記伝」の海外への伝播（6）「源氏物語千年紀」記念行事を網羅したまさに松田義幸氏の自分史とも言える知見である。

翻って松田氏との関りを振り返ってみた。

民間放送全国大会の山形開催の特別記念講演で著書「百代の过客」を上梓、日本文学大賞・読売文学賞を受賞して間もないコロンビア大学教授ドナルド・キーン氏にお願いできないだろうか、当時県企画調整部長だった冨塚陽一氏に相談、松田義幸氏を介して、ドナルド・キーン氏の記念講演が実現できたことを鮮明に蘇らせるものであった。

松田氏はこの著書を自分史の回想録としておられる。私自身も両親の没年に近くなったのでこの山形鶴翔同窓会に投稿した内容を中心に、大学同期会会報に書いたものを拾い集めたところ自分史になると考え、手作りの冊子に取り組んでいる。資料・写真類をパソコンで印刷してみた。スクラップ帳方式にしたが、バランスが良くない。アドビ・Photoshopを使って処理するとバランスよく割り付けできると教えられたが、残念ながら技術が伴わない。わが身内に配る冊子と割り切って製本してみた。

松田義幸氏の著書と比較するには失礼になるが、松田氏と80余年の人生の差の大きさを思い知らされた著書「余暇と祝祭」―文化の基礎―である。（2021年4月6日）